

会長就任の御挨拶

東京工業大学 松田 武彦



このたび、はからずも会長に選任されましたが、国内的にも国際的にもORの停滞とか危機とかがささやかれている現状を考えると、責任の重大さに身の引きしめる思いがいたします。

不確実性の時代、あるいは乱気流の時代などという言葉に象徴されるように、現代は、国の内外を問わず、まことに急速かつ劇的な変化が組織環境に起こって、そうした変化への適切な対応が切実に要求される時代であります。そこでは、伝統的な計画や管理の方法では間に合わず、より弾力的な計画手法や臨機応変の管理体制が求められます。このような状況は、これまでの組織運用の通念にとらわれている人にとっては脅威であります。逆に敢然と危機に立ち向う意気込みの人にとっては、またとない好機に転ずる可能性を秘めていると言ってもよいでしょう。

もともとORがイギリスで発生したのは、ヒトラーによるドイツ陸海空軍の急速な増強に対する危機意識から出たものであり、初期のORにはすぐれて戦略的な性格の事例があると言われております。私たちは、今こそORの初心に立ちかえって、危機回避の戦略ばかりでなく危機活用の積極的戦略を生み出すようなORの実践を目指さなければなりません。

ところが、ORの現状を省みると、戦略的・管理的・業務的と、いろいろな水準の意思決定に役立つはずのORモデルが数多く開発されているながら、そのうちで現実の組織において実施されるのは、業務的な意思決定に関するものを除けば、まだまだ数少ないというのが実状であります。つま

り、ORの専門家による理論的な研究はいちじるしく進歩しているながら、その実務上の活用度は未だに低いということです。このような事態を招いた原因はいろいろと考えられますが、その1つは、ORの専門家と、ORの結果を使う非専門家ないしは経営者・管理者との間で、コミュニケーションがうまくゆかないということでありましょう。

OR学会の使命は、ORに関する新知識の生成と伝播にあります。このうちで、新知識の生成については、論文誌の充実に見られるように、その成果は着々とあがっていると思われまじ、私たちがこの面における一層の進歩のために努力しなければならないことは言うまでもありません。しかし、ORに関するコミュニケーションがうまくゆかないということは、学会の使命のもう一方の面である新知識の伝播という点で、私たちの努力がまだ充分でないことを物語っています。

このような反省の上に立って、私たちは、機関誌をはじめとするさまざまな学会活動を通してORの教育・普及に努め、専門家と非専門家との間のコミュニケーション・ギャップを少しでも減らす方向の成果をあげなければなりません。そうしてはじめて、組織革新の原動力としてのORの真価が発揮されるものと思われまじ。

会員各位の御努力によって、こうした学会本来の使命が果されることを祈り、会長として少しでもそのお役に立つことを願って、就任の御挨拶いたします。